

日本応用地質学会 研究発表会 講演論文の原稿作成要領

1. 原稿の構成

- 1) 原稿は2ページとします。Microsoft Word 等で作成し、PDFファイルに変換して提出してください。
- 2) 原稿PDFファイルは電子投稿システム (<https://www.jseg.or.jp/jseg-congress/upload.cgi>) により投稿してください。投稿の際のPDFファイル名は、下記の例のように「講演番号の3桁の英数字_発表者名字のローマ字表記」としてください。電子投稿システムは7月初旬頃までに用意いたします。電子投稿システムのアクセスキーは、発表者に別途メールでお送りいたします。
(例) 口頭発表の発表番号1番の佐藤さんの場合は 001_satou.pdf
口頭発表の発表番号12 番の高橋さんの場合は 012_takahashi.pdf
ポスター発表の発表番号1 番の鈴木さんの場合は p01_suzuki.pdf
ポスター発表の発表番号12 番の山口さんの場合は p12_yamaguchi.pdf
- 3) PDFファイルのサイズは3.0MB以内とします。
- 4) 原稿はA4判で作成してください。そのままの大きさ、レイアウトで講演論文集を作成します。Microsoft Word 版の原稿フォーマットを用意していますので、必要に応じて利用してください。
- 5) 原稿には、プログラムに示された論文番号・表題と著者の氏名・所属を記入し、発表者名の前に○印を付してください。ポスター発表の場合は論文番号の前にアルファベット大文字の「P」を付してください。
- 6) 表題は第1行目の中央とし、1行あけて氏名・所属を行の右端に寄せて書き、さらに1行あけ、本文としてください。

2. 原稿の書き方

- 1) 原稿は原則として和文とします。
- 2) 講演論文集 (PDF) には、提出されたPDFファイルをそのまま掲載いたします。
- 3) 余白は上下左右すべて20mmとし、24文字×50行の2段組みで作成してください。2段組み以外の原稿は受け付けませんのでご注意ください。
- 4) 文字サイズは論文番号および表題 (和文) は14ポイント、その他は9ポイントを使用してください。
- 5) 現代仮名づかいを用い、漢字は原則として常用漢字を使用してください。ただし、固有名詞や広く用いられている慣用の語はこの限りではありません。本文中の人名には敬称を付けないでください。

- 6) 本文中に外国語を挟むことはできるだけ避けてください。ただし、適当な訳語がない術語や固有名詞はこの限りではありません。
- 7) 句読点は全角カンマ（，）と全角ピリオド（．）を使用してください。また、カタカナは全角文字を、英数字は半角文字を使用してください。
- 8) 単位は完全SI表記とします。
- 9) 図表および写真にはすべて、図-o、表-o、写真-oのように番号を付けてから表題を入れてください。表題の位置は、図・写真の場合は下、表の場合は上とします。
- 10) 図表・写真はなるべく本文の説明箇所と離れていない位置に挿入してください。
- 11) 図表は、論文の目的に合致した鮮明なものを用いてください。画像については、解像度が300～350dpiのものを用いてください。
- 12) 引用した文献は引用順に番号を付け、本文末に一括して記載してください。本文中には、引用箇所に上付き文字で1)、2) ...のように記載してください。詳しくは、当学会の論文投稿規 (https://www.jseg.or.jp/02-committee/pdf/R4_pubrule.pdf) に順じてください。

3. 著作権について

研究発表会講演論文集に掲載された講演論文の著作権は本会に帰属します。ただし著者自身が講演論文の全部または一部を他に利用される場合には、その旨を本会に通知していただく必要はありません。また第三者から講演論文の複製、引用、転載などに関する許諾の申請があった場合は、本会において検討のうえ、必要に応じて許諾することとします。以上をご確認のうえ、講演論文をご作成ください。ご提出いただいた講演論文につきましては、上記著作権に関する事項にご同意いただけたものとみなします。なお、過去の研究発表会講演論文集につきましても、著作権を本会に帰属させていただくこととしております。

4. その他

- 1) 原稿投稿期限：口頭発表およびポスターセッションともにこの原稿作成要領に沿って原稿を作成し、**2023年8月18日（金）**までに電子投稿システムにより提出してください。
- 2) 内容は当学会の論文投稿規定に順じて、発表者の責任で万全を期してください。
- 3) 不明な点がございましたら学会事務局までご連絡ください。

問い合わせ先：日本応用地質学会事務局

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-3-14

お茶の水桜井ビル 7F

一般社団法人日本応用地質学会

TEL：03-3259-8232 FAX：03-3259-8233 E-mail：office@jseg.or.jp

以上

5. 割れ目帯検出のための物理探査手法

Geophysical Method for Detecting Fracture Zones

ポスターセッションの
場合は「P5」

○応用太郎 (△△大学), 応用次郎 (□□研究所)

Taro Oyo, Jiro Oyo

1. はじめに

物理探査は非破壊・簡便に地下構造を推定できることから、ボーリング等の掘削に先だって実施されることが多いが、あくまで間接的な地下構造推定方法であるため、その適用にあたっては複数の手法による結果を総合的に検討することが必要である¹⁾。

ここでは各種物理探査手法の特性を見直し、より高精度で付加価値の高い調査法とするため、火山岩地域で比較試験を実施した結果を報告する。

2. 調査の手順

本調査の対象地は、東北地方の新第三紀堆積岩を基盤とする

部、受信部、増幅部、記録部から構成されている。システムの構成を図-1に示す。土木地質調査に限らずこのようなシステムが一般に使われてきている。

現在でもトンネル、ダムサイト等の構造物調査には

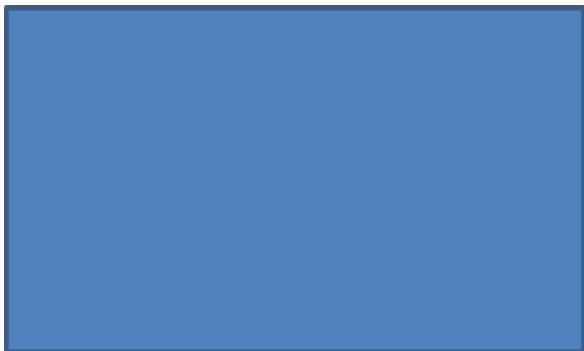


図-1 測定システムの構成

必ずといってよいほど適用されているが、そのための測定や解析手法は基本的には従来どおりの手法で続けられており、多くが手作業と経験を要する作業となっている。岩盤の弾性波速度は砂や粘土などの未固結地盤より速く、堆積岩では時代が古いほど速度が大きく、火山岩であれば地表近傍で固結した火山岩より地下深部で固結したもののほうが弾性波速度は大きい。したがって、地表から地下深部にゆくにしたがって弾性波伝播速度が速くなるという地下構造が存在している。屈折法は、地下深部ほど弾性波速度が大きくなるという仮定に立脚して地下探査を実施する。

測定に際しては各ピックアップの出力信号を記録するとともに、震源から波動が出た瞬間が記録されなければならない。震源から波動が出た瞬間の信号をさしてショットマーク²⁾と呼ばれている。ショットマークからそれぞれのピックアップに波動が到達するまでの時間が初動走時となる。ショットマークの精度は重要

る。爆薬を震源として用いる場合は爆薬を爆発させるために電気雷管に流す点火電流がショットマークとな

50行

